

180  
才  
中

平系  
繪入

衛生要集  
中

法苑珠林

卷之四

4

持

持



往生要集卷之中

目錄

第一

餓鬼道之半

第二

畜生道之半

第三

餓殍道之半

第四

人道之半

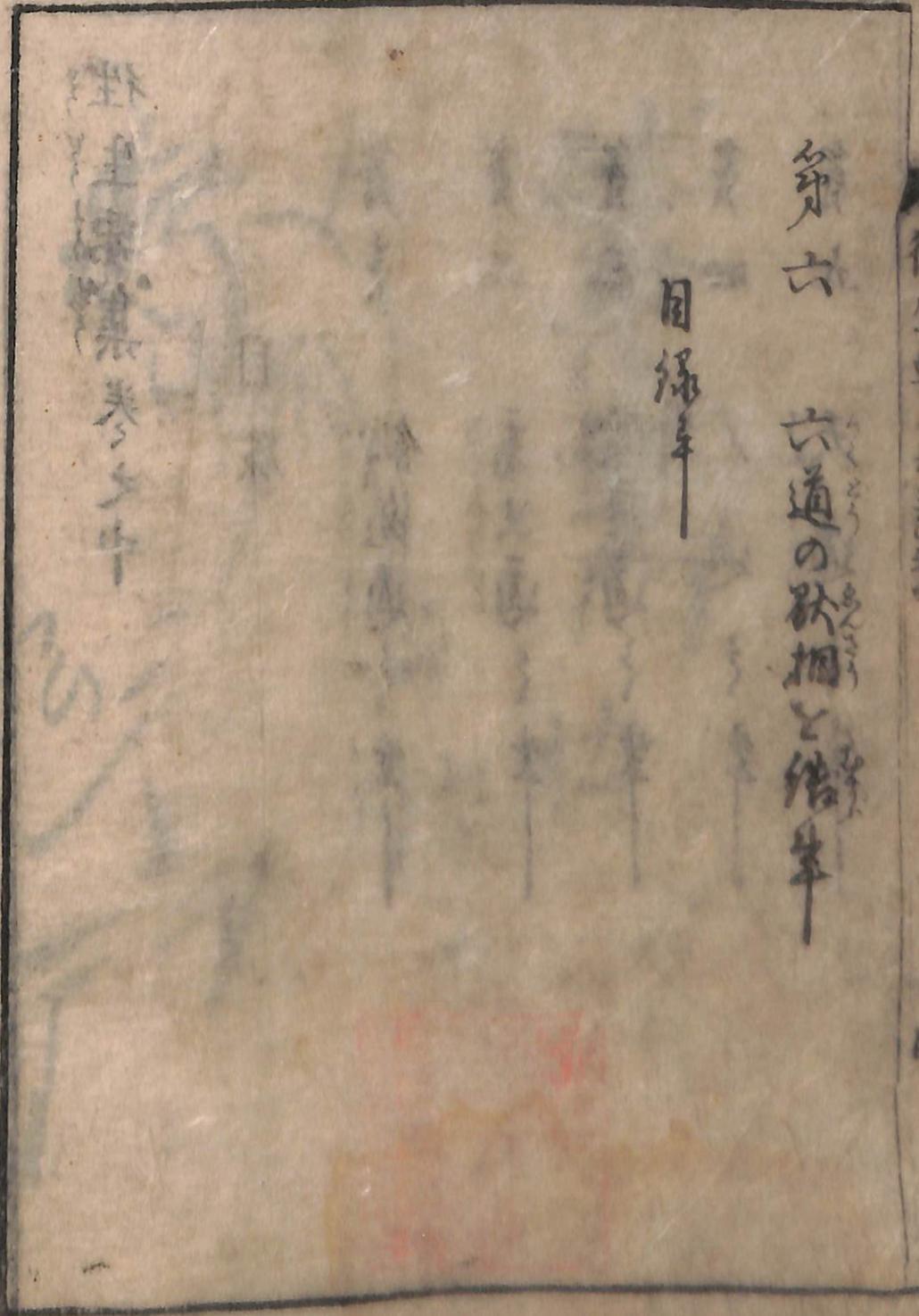
第五

天道之半



第六 六道の跋扈と倍半

目錄年一



往生要集卷之中

第八 餓鬼道と半

○夫餓鬼道と云ハ彼所ニツマハ地の下五百由旬あり。閻  
 魔王處あり。ニツム人天の間小なり。其さぬまを多々以バ今更  
 小少分と明を。或ハ兜のさけを尺。或ハ人の長乃ぞく。或ハ千  
 瑜倍那。或ハ雪山のじ。或ハ餓鬼あり。灌身と名付く。其鬼  
 大さふと多く。人小さく。半二倍也。初もなく。用も。おとこ。み  
 其の鼎のじ。やのよ。其身と焼る。其の昔た。を  
 び。ちりて。人。と。焼。る。た。る。若。び。し。ひ。と。受。る。地。又。或。ハ。か。こ  
 る。食。吐。と。名。づ。く。其。身。大。く。を。長。半。由。旬。形。を。受。り。物。ら







Main body of handwritten text in the top section, consisting of approximately 10 lines of dense script.

Main body of handwritten text in the bottom section, consisting of approximately 10 lines of dense script.

いまおし。たゞあをかりいまとはふとものあはれすまを又地獄に  
 のたぐひの国のうらふまをて周のうらふ死し。貴州のたぐひの人の  
 身お生れと人お生れと入りあくの就のたぐひの。我を三種の若  
 とうけて止事れし。或は又地獄に其方大さふたのあはれ。法事との  
 心腹受あけてわざまう。はうの復しとありく。はれ法のおれ生  
 呪まう。うらふ事いまおし。或は又生れと入りあくのせれりのもはを  
 或はうのものと百のうらうらうのうらひの。或は一方由旬のあまの  
 もはをがくの。うらふあはれの畜生の。或は一まの間の七時或は  
 一劫乃至百の万位劫を歴て。善業の若と又。是の悪知を断ふ  
 して。とばふ人の修業とうけて。修業とて。はくめつとるものあり

畜生道之古又





つこの骨とくつかの骨はうねのちのちとくつかの骨はたと  
 がひのちのちとくつかの骨はうねのちのちとくつかの骨はたと  
 ちのちとくつかの骨はうねのちのちとくつかの骨はたと  
 ちの骨はうねのちのちとくつかの骨はたと  
 の骨はうねのちのちとくつかの骨はたと  
 たら。二百六十の骨は集つて人のうねとあつたといふ橋やあつた  
 家のぼし然の骨はうねのちのちとくつかの骨はたと  
 めづわらうとくつかの骨はうねのちのちとくつかの骨はたと  
 ちのちとくつかの骨はうねのちのちとくつかの骨はたと  
 ちのちとくつかの骨はうねのちのちとくつかの骨はたと  
 ちのちとくつかの骨はうねのちのちとくつかの骨はたと

修羅道





Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 10 lines of text, with some characters appearing to be in a different script or dialect. The text is somewhat faded and difficult to decipher.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper. It consists of approximately 10 lines of text, with some characters appearing to be in a different script or dialect. The text is somewhat faded and difficult to decipher.

あり決の不淨とほむ。控へ更なる親ふ美様とぬるおと  
 又様様の備ふ回く身臭く不淨ありとかもせ。お考へて  
 おも。姑と外の敷色とのこと。月の不淨と規せはことり。お  
 又今後くは後塚のあつふ捨。一日二日乃至七日はぬま。其の  
 ふくはてさうのま。瘰と臭くた。まは穿流血をうわら。驚  
 臨為物狼りくのも。黙めほ。みとれ。食ふ。も。く。め。く。ひ  
 てのち。不淨お。控へて。毎量のじ。けら。臭く。あ。入。ま。く。ら。う。  
 人はとき。ふ。半。死。する。大。よ。も。む。ら。り。臭く。と。覆。ひ。と。ま。さ。る。  
 乃至白骨とぬる。ぬま。の。ま。の。ほ。む。離。も。も。足。髑。髒。ま。じ。こ  
 お。ま。ふ。周。ふ。う。る。見。お。け。じ。ぬ。を。死。お。結。び。て。白。骨。も。い。ら

人道事



うるは遂に朽くまでけらうふ交て去る白赤天の結子回くぬ結  
 が起ぬの手つらう方うるは白骨とありて結小部ふ折ぬまさう  
 ちるべしけりへ始終不洋なるを中一の男女をか又別のあり  
 惟り智ある人さうふおとまをぬえや故不止脱小回くつまけ相  
 とえどねむを深とあつて強し。お是とえまじべ致心すてやみ遂ふ  
 母がたぐへたといへ集とえざるはけく飯と喰へたらまら良  
 氣と奥つまは別嘔吐せ。又つらうおけ相とわらむ眉半服  
 能蓋丹厚も一じの尿粉とまよお交うがじ。又たまらう戸  
 かん紅粉と看らうどし於服うらむをばかさんや身小逆舟欵化  
 唾来見や。おのぞくおらおは是煙うくの病の大要効也

○二つお昔といひけり身くらめて生れしうらうら昔お昔のちを  
 交る。交積経は流るるど。おの男子と女子くらめて生れ  
 らうる。或いはちを掛け或は夜よりていつて或は鼻息を  
 いらむ風身ふるむと昔はとうらう年。生るる牛の皮をとんた相  
 喰ふふるむと長大七後又昔はとうらう。同一煙ふ煙をけり身と  
 うけて二種の昔あり。眼耳鼻舌咽喉牙齒骨眼を望み燃の  
 病と生れ。おのめくは百日病との身とま。是と月昔とありけり  
 又或は年樹ふるむを種く。九明の妻と又或は耳鼻ととうらう年  
 望とまらう。燃の毒鬼憑神其まらうとをを飛やうし。又或  
 長短百毒樹城まらう。の毒の虫と。食。まらふたうらう。仇うらう



あふあねどつらふ時うつ人うつてまのみのまをとなすもつら  
 大經の偈わいしく一切衆の世留お生けるの法死あきれば今  
 なるにらびるを 終つありまさうある者のあらずを久  
 遠のいのちをどうもまさうなる幸も久しくさまふはうら  
 わしきも病おたえれ命の死のちお春る法とて事ある者  
 なり又飛業無能お曰く水は法おつひお清す火はうらんあ  
 てえく燃ず日如く須臾おつひ月ほてすお又く位とのと  
 業へましゆ人をもと命のちとく體のきて又い人おまらう  
 たる唯同とて信をま上世をこれせしむる唯衆の身まの  
 こま命とおまらふとられば仙人おまらうく凡おのりまら

能く自らおゆう法づえや又仙法に侍るまは命をば山  
 めんくとかうのうく命のながり久くそびせく命の  
 地も分ずそ泥のうみとありそ又あつちひけをばはしと  
 七さびアアる他人も終お命とのれえ命のちのやうらみ  
 入定やおうくまらりし人死とらけざるならしは彼仙法に  
 て仏の身と終るのばあて冥途とてしをばさるるなり  
 ふうふうい息とそも又お終るうかぬんだまふくか  
 としこれとらうつ仏のと人おあつてあ後修行とらけは  
 命の果と求むし止観お曰命の教免と云りのまら人  
 人あつてはをせむとそもば身おやうくりんは命の



やうかへ。海山こころ申の中乃。いづるぬん西あり。城のぞく。疑  
 念一。心太ふおそれて。麻ふほむり。とやえんせびら入せんとも  
 耳ひせず。び然ととくふごさく。中へ。知謝のふと。り。思。び。  
 又。回。く。へ。申。平。の。身。毛。を。し。あ。ひ。つ。つ。り。ほ。む。り。て。ま。ぬ。が。き  
 人。半。と。ま。む。ら。此。と。き。い。ん。ふ。と。ま。て。ん。大。さ。ふ。た。い。ふ。く。う  
 妙。人。又。生。老。病。の。三。つ。ふ。あ。て。れ。き。う。ふ。せ。ば。死。の。ふ。い。ゆ。さ。い。せ。ふ  
 せ。び。ぬ。ん。と。又。ね。ん。ご。ん。お。う。ん。お。う。あ。は。陽。と。さ。う。火。と。う。む  
 妙。一。入。六。欲。し。と。が。を。摩。ん。ご。ま。は。し。に。上。ま。を。人。の。う。の。ど。  
 実。不。厭。難。を。

山人 廿八 天道 一 事

○支天道ふ三ツあり。一ツは。微塵。二ツは。色。響。三ツは。を。も。も。也。  
 その志を。ほ。ひ。う。く。して。ほ。ま。び。く。ふ。の。べ。じ。物。利。天。と。呼。ぶ。  
 又。手。や。う。と。お。と。り。ん。先。天。人。の。つ。ま。を。ぬ。ら。う。り。ん。ふ。う。あ。ひ。つ。  
 た。の。み。う。ま。う。あ。れ。い。命。の。む。ら。ふ。あ。り。ぬ。ま。い。又。表。の。う。さ。い。は。  
 ぬ。ら。ず。一。つ。う。た。髪。と。ち。す。ち。ふ。志。や。み。二。つ。う。天。の。羽。衣。を。着。  
 け。た。れ。三。つ。う。腋。の。あ。さ。う。汗。あ。る。は。つ。う。あ。相。志。つ。く。う。ら。あ。れ。  
 又。つ。う。本。の。と。と。ふ。来。一。ま。げ。巻。と。ま。い。と。あ。け。る。は。色。こ。も。え  
 け。い。ぬ。ま。い。天。女。ん。ど。と。く。く。い。ひ。ま。を。け。持。て。う。う。ま。じ。う。  
 本。の。間。ふ。ら。ま。う。び。ほ。思。む。も。け。れ。ぬ。る。は。と。だ。あ。げ。き。て。い。ひ。ら。え。  
 け。然。の。天。女。と。我。身。つ。ひ。ふ。お。を。う。ふ。げ。ん。と。今。う。あ。ひ。ぬ。く。ま。

とまづるまじくめでたき事なむのまじりなき事。今ういとやたのむじきか  
 とぬく。まじり又我とまじらんや。昔人の文殊とてうてまの娘と  
 へぬ。一奉親の室をよとまみあふもよう。おや、辨務殿のあある  
 とも。おいく。見がごとく。親天皇家あつらふとのふのりあへ。京東苑のた  
 とも我又あがらぬせん。維林苑の酒喜ふえと。彼とつ。縁ま。親亮  
 苑の中へあをびと。ゆえに。加波村ののりわら。白玉の雲るふれ  
 する半は。あなく。辨務池の本小田あみする思ひぬく。は往の耳  
 家もなやとて。合見ん。五州音楽とも我の。まら。ば。あ。れ。な。那  
 三づ。う。ひ。ん。び。ら。う。み。あ。ひ。ひ。つ。つ。は。う。う。う。ば。ま。ま。と。れ。命。を  
 と。い。ひ。と。い。ま。人。ま。む。の。れ。も。ぬ。う。へ。て。又。も。た。の。こ。ま。の。い。ん。が。の

天人異事



馬野山波集海ふたとどはありあめいしつらむふいしつらむ。すふ  
 のぞあふりなる。けさのころみ地くころとま  
 とゆじく維のありぬべ。さるが法念修も天上よりころ  
 形んとする大君極と生ん地く乃鳥君とくくさむびく  
 ろしふほよして十六づのよう地獄の君いかりさ。又大徳の  
 天人まらむ。りとの天女えぞくいけ天人とあま捨て大らふ  
 志とくく威徳ある天人のむふ志とらるる老とび中と  
 かりも。ほあふまひとあてくる。ひつる歌天も。ひつる  
 く蒼んも又上男の二天ふかろいあなる色せ天よと志り  
 ぞける。其音しむとらるる。乃と根相天よと阿鼻の業と

まぬまむあたるは天上のたのしみと文小まことしり  
 六道のそのららぶとらあはや唯後うきも西方の  
 ち退のうそあぬる金一

才六 物下て六尺の歌相と結ぶ事

○はりく物下て歌相と親するふ一箇ひとふらうし  
 終兼へんは山合来りそのれざりねんはとらせおるふえん  
 念のくせりのがうう心と度うく又欲ふあして事  
 とはひのふれもひ事らぬとあふひの依藤とあひ  
 壺が如き形んといふうんやのんや又やとわく刀山火湯と  
 ころ七 誰かあむ老い身と老一なるる音んやさるる法

至阿闍世王あせきおう飛人とびにん小若こわくのついで我われすじの飛とびてもははるるもああるまじ  
 女むすめよりより飛とびとほほくくく自みづからら小こ若わくよりより飛とびたたるるままははるるままははるる  
 て飛とびおおろろ物ものををしし。父母ちちうぶ事ことももととくく事ことららげげだだるる何なにもも  
 虫むし離はなのの因いんとと志し回わいととししととりりけけおおももううせせ着きるる身みのの業ごう成じやうけけて  
 悪あく乃なりととききくくととああははてて安やすああととももむむじじ下くだりり大だい集じふ終しゆうのの偈ぎ不ふ妻さい子し  
 孫まご宮みや及およびび王おう位いもも命いのちたたるる時ときののもも入いりりととああららるる身みののああららたたるる  
 戒かいとと施せととああ放はう逸いつとと今こん世ぜ後ご世ぜ傳でんととななるるとと又またをを取とりりののままととくく展けん  
 揚あくくととつつくくととほほくくてて昔むかしととううけけいいととううふふ生なまじじややららずずふふ死しししてて  
 輪りん轉てんききいいままりりしし經きやうのの偈ぎ小こをを人ひとのの一いつ劫ごうの中ちゆうおおろろろろのの燃ものの身み  
 骨こつおおつつめめりりととくくらら中ちゆうががままじじりりししるる附つ布ふ羅ら山さんののままととくくななるるんんとと

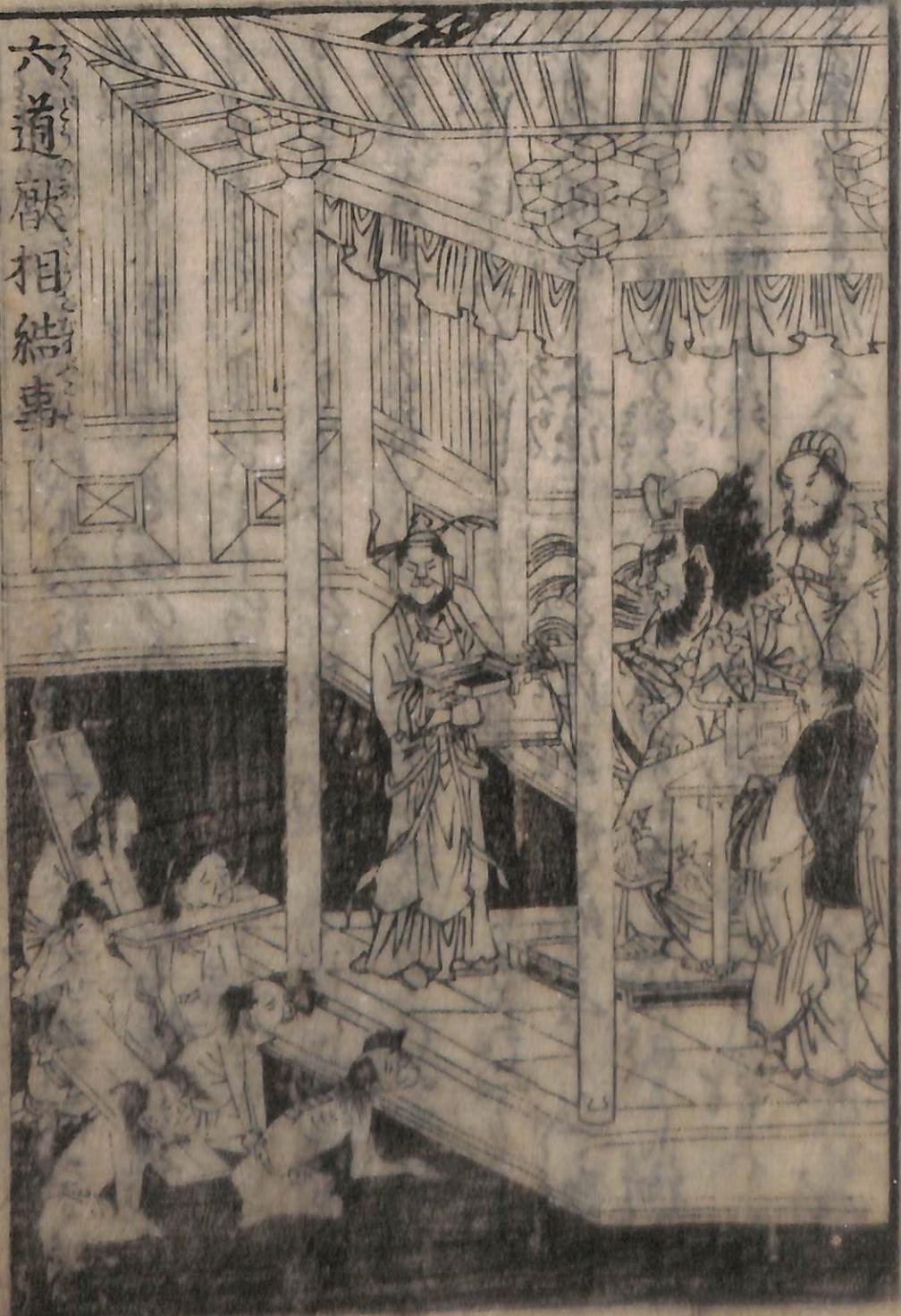
子こ半はんふふらんらんふふししとと飛とび志し天てんののししとと云いふふゆゆととふふけけ安やす樂らく世ぜををららい  
 獄ごく中ちゆうななりり彼あ安やす養やう極ごく楽らくハハ幸さい國こくななりり。いいととききととああららるるののああくくちちううとといい  
 ととひひののびびてて持も束しゆのの本ほん重じゆうへへ久くぞぞととんん實じつ獲かく經きやうのの偈ぎおおははりりあありりくく  
 のの惡あく業ごうととほほくくてて財さい物ぶつととももああららままりりととままいいくくてて持もびびたたののししとと  
 いいととききもも會かい持も時ときくくゆゆみみおおせせままりりななららずずもも妻さいももととくくららずずおおれれしし。いいとと  
 んんやや三さん途とののおおももれれししここ中ちゆうおおのの妻さい子しかかああののととののとといいふふ馬ば車しや財さい  
 室しつももややぞぞ人ひとののおおももれれしし。三さん途とのの喜きととううららななららずず昔むかしととももてて  
 ううけけららたためめししららぶぶをを。一いつととびび死しししててささららぬぬままはは又また母ははをを先まへ妻さいのの前まへ  
 友とも僮どう僕ぼく財さい財さい一いつ切きととままりりああじじままららばば唯ただ親おや業ごうののままははひひおおちちてて乃なほ





破毒とやけがせし美味は又ぞやくの如しと歎しておぬの水  
 とのりくとまき清じごーげとこのたんあふ合をりらゆと  
 ども厚味としごりには後とやあひて心と寄する年なりと  
 けゆふ小とやあひて大としあひ年あはれしあまもつうあ  
 りて又藤張ありといふもこゑと徳しきとやせふとや  
 けと好さとじごり傍と長びんや想して肉心の佳とこ  
 こよとまひ卵物とあつうかりして人の淨練ととうやまん  
 とのが教をこゑとつうるのあ。こが倫張もろもろとらごして  
 悪衣あふ食とらうらもの。未昔ふ斗ふとべとて彼かん  
 えの二百竹軍ふくあんとて天日ときやう離志うりしと安んず

六道厭相結專







たしめらるるくべしに毒地の高のやうにすも人の心をまかせん  
 加ふ法は心もふけりて何しもの心よ上け偈の中ふれふ事  
 昔やと義とのくくは是とまきくめをたとふる又は心は心の  
 上の偈おしくは死のえさるる死の心は心の心は心の心  
 たらひと皆中へおを悉と中あを場おのりむあしくはの事  
 昔とくくは身とあふひの正に九の完より石清なる所  
 のむの業とこのしごとくは心と身とわのしむはる  
 もこれおこるる中かしく相とらめてみたりふ別するは別を  
 大欲の本おを心もいみたりふお別せたるは欲すあらら改  
 邪よりとんざくと生れし金とより人の心と生れし心と

隠士伎術事







烈士其也とかんては半と如然とて如も其意にうらむる所の  
て死す野城 夢のうおののじは法は又為さるゝと其おの事と  
時ハアハ遊てるとすかろお唯城論小曰いまこと其のさうとたれ  
ハ昔小夢の因ふもさう故小仏説て生死者夜とくろく○同とい  
其意常若ぞ言の親となきバ何とあ業の自洞自交と  
はしくんや ○又て曰くは親ハ小業ふらきらぬ大業より通  
ずるや 法花經小云か。大意想と事とく業は愚辱と  
衣と 法法の之と成とて是ふねろく 法法とありと上  
徳法のその親尚大意想とさ法さむぞう小受や 昔生中  
等の親念ハ其の廣の悲親とりよんをや 以お小大殺其の終

小不淨末の親念と又其の廣の法とわん其知すましくば更  
彼理文とよ其一○同て曰く如のごとくは親念ハいりある利  
益ありや 又て曰く若常ふくれどく心と相入依ぬまは欲  
まくあくくふして乃至於於而念とてみる半あきふらり歎  
きあへむらざるく大莊嚴論の親進解業念の備ふらるに其此  
うろのそむひ形き時わとらうてとらふは法世の半のこむさ  
まいとあをて布施と持戒と禪定とて依りて其死のあふ各  
ろお業とてぬて登らんといて若と依りんと求むまは其益  
照く智者ハ常小親念とて大衆の悲とめさるまは其  
あまげまして心をねくじらる若ハ命の終るふはむびてと



鶴子尾  
良